（様式２）【ホームページ掲載用】

研究課題（テーマ）	乳児のなだめやすさの基礎的研究 ―生理的屈曲姿勢が乳児に及ぼす影響―		
研　究　者	所　属　学　科　等	職	氏　　名
代表者	看護学部	講師	村田美代子
分担者	看護学部	教授	松井 弘美
	看護学部	准教授	工藤 里香
	看護学部	講師	小林 絵里子
	看護学部	助教	岡田　麻代
	看護学部	助教	三加 るり子
	看護学部	助教	西村 香織
	工学部電子・情報工学科	教授	鳥山 朋二
	工学部電子・情報工学科	講師	浦島 智
	工学部電子・情報工学科	助教	森島　信

研究結果の概要

乳児の泣きには意味があるとされているが、育児に慣れない母親にとっては児の泣き声が母親のストレス要因となることや児の泣きの解釈がうまくできない事により育児不安を生じること、児の泣きが母親の育児に対する不安感や抑うつを高めることなどが先行研究で明らかとなっている。胎児は子宮内の環境下では屈曲姿勢を保持しているため、出生後から首がすわる（定頸）生後 4 か月ごろまでは生理的屈曲を保持する抱き方が推奨されており、その生理的屈曲姿勢で抱くことで乳児が泣きやむとして書籍で紹介されている。

しかしその抱き方における生理学的な知見から泣きやむとされる根拠は示されていない現状にある。そこで本研究では、①生理的屈曲姿勢で抱かれた乳児の生理学的状態と、②抱き方の特徴を明らかにすることを目的に調査を行った。

平成 30 年度に特別研究費の支援を受けて行った研究では、生理的屈曲姿勢と抱き方の比較を行うためにたて姿勢で乳児を抱き、乳児に心電計、経皮酸素飽和度測定器を装着し、10 分間抱いた状態で生体情報を収集した。合わせてビデオ撮影による乳児の行動を観察した。抱き方の違いによる心拍数の差はみられなかったが、抱く時間によって乳児の行動の違いがみられた。

今回の研究の成果は今後、国際学会、国内学会で発表の予定である。

最後に、本研究課題では保護者の方々のご理解とご協力のもと、心電計をはじめ複数の生体センサーを用いて、お子様方の生体情報を調査させていただきました。ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

今後の展開

本研究では，研究協力者の募集期間が限定されていたこともあり、今後さらにご協力をいただき、データを増やし分析を進めていきたいと考える。また、看工連携研究として工学部電子・情報工学科と連携し、Kinect を用いた乳児の抱き方の姿勢解析については継続研究とする。

生理学的な解析結果から乳児にとって有効な抱き方が明らかになれば、乳児の泣きに対するなだめ方の対応力を身につけるプログラムの開発へと繋げることができると考える。